

永井博先生を悼む 永井博先生を偲ぶ : メタフィロソフィーの構想

著者	米澤 克夫
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	13-15
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122562

永井博先生を偲ぶ

—メタフィロソフィーの構想—

米澤 克夫

私が東京教育大学文学部哲学科哲学専攻に入学したのは、東京オリンピックがあった昭和 39 年（1964 年）である。下村寅太郎教授がまだ在職しておられたが、翌年度いっぱい定年と聞いたので、2 年生になると早速先生の哲学概論の講義と、Hegel の *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte* の演習に出席した。初級ドイツ語を修めたばかりでこの演習についてゆくのは並大抵ではなかったが、哲学科で学んでいるという実感を味わわせてくれるアカデミックな演習であった。また永井博助教授の Morton White の *The Age of Analysis* 講読の哲学演習にも参加した。訳語一つも忽せにしない原書の厳密な読み方を学ばせて頂いた。当時私は若者らしい情熱もありニーチェなどにもムード的に魅かれていたのであるが、基礎から厳密に哲学をやりたいということで記号論理学や分析哲学を学び、「存在する」の意味を分析した卒論を書き、43 年 4 月に修士課程に進学した。

しかし折しも筑波移転問題が紛糾し、同年 6 月文学部学生自治会がストライキを宣言し本館・E 館が封鎖された。翌 44 年学部の入学試験が中止され、大学院も 2 年近く授業が全く行われなかった。3 年目に永井先生は最初の数回ご自宅で講義を行われ、奥様にお心尽しの食事を出して頂いた記憶がある。その後 E 館で授業が行われるようになり、その気になれば 3 年間で修了できたはずであるが、その頃私の心が定まらず、結局修士課程に 4 年間も在学し、心身問題に関連して G.Ryle の *The Concept of Mind* で修論を書き、昭和 47 年（1972 年）4 月に博士課程に進学した。

永井先生との親密な関わりは、当時下村先生や永井先生が深く関わっておられた科学基礎論学会に入会し、心脳同一説を検討した論文を『科学基礎論研究』に投稿したあたりからである。昭和 57 年刊行の還暦記念論文集『世界観と哲学の原理』（東海大学出版会）には下村先生も寄稿されているが、私も執筆者の一人に加えて頂き、「ウィトゲンシュタインにおける主体・言語・世界」という論文を寄稿した。平成 6 年（1994 年）刊行の古希記念論文集『哲学思索と現実の世界』（創文社）には編者、

執筆者の一人に加えて頂き、「ウィトゲンシュタインの意志論とその意義」という論文を寄稿した。先生には、異なった専門分野の若手の研究者にも頑張っていると認定された者には声をかけて下さるという心の広さがあったように思う。お送りした論文の抜き刷り等にもきちんと目を通してミス等も訂正して礼状を下さるまめさもあって大変有難かった。

先生のご業績を拝見すると、30代で『ライブニッツ研究 科学哲學的考察』、『近代科学哲學の形成』、『ライブニッツ』、40代で『数理の存在論的基礎』（学位論文）、『現代自然哲学の研究』（田辺元賞受賞）、『科学概論 科学の哲学』を上梓されている。また私が在学中の50代前半には、『生命論の哲学的基礎』を、60代前半には『人間と世界の形而上学 哲学原理の探究』を上梓されている。下村先生の影響もあったのであろうが、まず哲学者の文献研究から始めて、数理、物理的自然、有機的自然、人間と文化と世界に関する理論哲学の解明を経て、道徳・倫理に関する実践哲学を構想するに至るといふ、まさに哲学の王道を踏破しながら着実に研究成果をあげられたわけである。

私が大学院に在籍中には『生命論の哲学的基礎』の一部を講義されていた。その該博な生物学の知識にも驚いたが、個別科学としての科学と対比された哲学的営為としてのメタサイエンスの理念、その理念に基づく生物学と対比されたメタバイオロジーの構想、部分的・派生的実在としての科学的実在と対比された「究極的、非決定の、隠れた実在」という概念、「普遍的フィードバック」の概念の提唱等が印象に残っている。「メタバイオロジーは、一方では個々の生物学研究の事実上の前提となる生命論を基礎づけて、その権利を正当化するとともに、他方では同時に、それ自体一つの哲学として究極的、非決定の、隠れた実在の哲学、すなわち世界の哲学となる。そしてこれが、本来の意味でのメタサイエンスとしての哲学にほかならない。…メタバイオロジーは、最終的には、世界における人間の位置、意義、価値を問うところの、哲学的認識となるであろう。」（同書 397、8頁）「普遍的原理〔普遍的フィードバック〕を機械論的に解釈すれば物質の物理・化学的進化の原理となり、生氣論的に解釈すれば生命力による有機体形成の原理となり、特に有機体的に解釈すれば有機的または人間的進化の合目的的原理となるであろう。すなわち、三つの生命論は、解式の相違に帰することになる。」（同書 396、7頁）このように永井哲学の特徴は、様々な部分的知識、立場、イズムを絶対化することを戒めながらも、「究極的、非決定の、

隠れた実在の哲学」の立場からそれらすべてを包み込んで総合化するという点にあると言えるのではないだろうか。

そのような態度は、『人間と世界の形而上学 哲学原理の探究』において提唱された、「究極的実在からさまざまな実在像が描き出されてくる経緯を説明し、諸世界の形而上学諸学または形態学を構成する」（同書結語 383 頁）ことを目指した「原型的哲学の理念」としての「メタフィロソフィー」の構想にも見られると思う。しかしメタフィロソフィーも、唯一の哲学であろうとして、結局は再び諸哲学のなかの一つの哲学に転落せざるを得ないのではないかという疑問にも、「究極的実在からの世界モデル構成も、視点の異なるに応じてますます多様となる。そうした視点のなかで、私の視点は、あくまでも『私の』視点であり、他の視点と異なることによって、まさに独自である。しかし、他の視点と異なることはあっても、それらと対立したり矛盾したりすることはない。のみならず、いわば隠れた次元において、默契的な仕方で相互に連合していると考えることができる。ここでも、視点の連合場が形成されると言ってもよからう。それは、究極的実在が隠れた実在として、原理的に開いたシステムだからである。このシステムはある意味で、モナドロジー的である。しかしそれは、…開いていると同時に、必要に応じてその都度閉じつつあるシステムである。すなわち、力動的に開きつつその都度閉じ、かく閉じつつ開いていくシステムでなければならぬ」（同書 385 頁）と謙虚に適切に答えられている。『哲学思索と現実の世界』に掲載された「行為の個性性と普遍性—実践哲学的展望—」という論文のまえがきでは、実践哲学の構想を語られ、本文の終わりではアリストテレスの「思慮（プロネーシス）」の概念を重んじる C.E.Larmore の道徳論にシンパシーを吐露しておられるのは興味深い。この主題はその後の展開もあったのであろうが、本論文が未完とされているのはかえすがえす残念である。

万学を深く広く修めてこれだけのスケールで一貫した哲学体系を構築しようとした哲学者は、研究の細分化が進んだ近年の日本では、廣松渉あたりでもういなくなっていると言えるのではないか。その壮大な志たるや私など到底真似のできない偉業と感嘆せざるを得ない。崇敬の念を抱きつつ心からご冥福をお祈りする次第である。

（よねざわ・かつお 聖心女子大学文学部教授）